

## オープンキャンパス 2007 ～みなさん、理学の世界へようこそ～

理学部オープンキャンパス委員会委員長 中村 栄一（化学専攻 教授）

理学の世界へようこそ。皆様のご来学を心から歓迎します。このオープンキャンパスでは、皆様に理学の魅力を一瞬、存分に体感していただきたいと思っております。理学部に在籍する学部学生、大学院生、博士研究員、教員、職員らメンバー総出で、日ごろの活動の成果を皆様にお伝えしたいと張り切っております。

もしあなたが高校生なら「東大生の生活はどんなかな？ 東大生はどんな高校生活を送ったのかな？」、大学生なら「大学院生はなにをやっているのかな？」など

の疑問をもっておられるかもしれません。各学科の展示近くに設けられた「コミュニケーションスペース」で大学生や大学院生に話を聞いてください。

それではそもそも「理学部」は何をやるところなのでしょう。森羅万象に潜む「なぜ」を解明すること、未知の新物質を造り出すことなどが理学部の研究です。また先端的研究活動を行う一方で、世界をリードする若い人材を育てることが理学部の仕事です。卒業生の活躍の場は、純粋の自然科学研

究から石油に代わる新しいエネルギーの開発研究まで、大きく社会に広がっています。本日、理学部を訪れた皆さんと、近い将来この理学の世界で再びお目にかかれることを楽しみにしています。

なお本日、展示されている研究成果の多くが文部科学省科学研究費補助金、また日本学術振興会や科学技術振興機構の提供する日本国政府の競争的研究資金を用いて行なわれたものであることを申し添えます。

### 理学部 2号館も公開中 ～生物学科のオープンキャンパス～

井原 泰雄（生物科学専攻 講師）

赤門から本郷キャンパスに入って右手の奥に、理学部 2号館があります。一見して歴史の深いこの建物は、1934年に完成したもので、以来、生物学科の研究教育活動の拠点となっています。普段は関係者以外が立ち入ることのない場所ですが、オープンキャンパスの日には、生物学科の会場として公開され、大勢の見学者が訪れます。生物学に興味のある方にとっては、最先端の研究や教育の現場にふれる絶好の機会です。理学部オープ

ンキャンパスの中心となる 1号館からは少し離れていますが、キャンパスの散策がてら、ぜひ足を運んでみてください。

生物学科では、分子、細胞、組織、個体、集団など、生命現象のさまざまなレベルについて、多様な手法を用いた研究を行っています。オープンキャンパスでは、教員による講演会と研究室の見学会を通じて、生物学の面白さと奥深さを直に感じることができます。昨年の講演会では、「生き物は動くーウニ精子で探る細胞運動のメカニズムー」、「植物のかたちを考える」、「普遍性から多様性・進化へ」、「模倣の意義と進化」など、多岐に渡る話題が取り上げられました。また、「もっとたくさん

の研究室を見てみたい」という声にお応えして、今年はより多くの研究室を公開する予定です。

※ 展示の詳細は当日配布するパンフレットをご覧ください。

※ 当日は理学部 1号館全体受付で受付をしてからお越しください。



■ 本郷キャンパスの地図

### 今年もやります、 コミュニケーションスペース！

森岡 優志（地球惑星科学専攻 修士1年）

皆さんの「??」に理学部の学生がお答えします。

理学の面白さってなんだろう、進路を決めたいけど何をやりたいのかははっきりしない、理学部の人って将来どんな仕事をするのだろう。昨年のコミュニケーションスペースではこのような質問が数多くありました。そこでは皆さんが理学に対して関心のあることや疑問に思うことなど、現役の学生に直接、相談するこ

とができます。

一年に一度の理学部オープンキャンパス。実際に学生の生の声を聞いてみませんか?? 普段聞けないような学生生活や授業のことなど貴重な話が聞けるかもしれません。皆さんとも年齢が近いのできっと話しやすいはず。中には展示に関する鋭い質問もあり回答に困ることもありましたが、昨年は皆さんから好評をいただきました。

したがって、今年もやります、コミュニケーションスペース！皆さんの将来のきっかけとなるアドバイスができるよう現役の学生がお手伝いをします。ぜひ一度、

コミュニケーションスペースへ足を運んでみてください。その中で皆さんに何か新しい発見があることを望んでおります。皆さんのご来訪お待ちしております。



■ 昨年の、地球惑星学科・地球惑星環境学科のコミュニケーションスペースの様子

## 女子高校生のためのサイエンスカフェ、開催される

広報委員長 野中 勝 (生物科学専攻 教授)、  
横山 広美 (広報室 准教授)

「ディズニーランドよりも楽しかった！」  
終了後に2人の高校生が駆け寄って、  
そう感想を述べた。サイエンスとディズ  
ニーランドは比較するものではないが、  
女子高校生として最高の褒め言葉だろう。  
2007年6月17日(日)、理学部主催と  
しては2月に引き続き2回目の、また  
“女子高校生のための”と銘打ったもの  
としては初めてのサイエンスカフェ本郷  
が開催された。

当日は先着順で選ばれた55名の女子  
生徒が、秋田県や新潟県などの遠方を含  
む日本各地から集まった。当初、緊張気  
味だった参加者も、通常の講演と違って  
リラックスした雰囲気の中で進むカフェ  
に次第に打ち解け、最後は予定の時間が  
きても立ち去りがたい様子をみせていた。  
女子生徒の理系進学はまだ低い。中には  
理系を希望しても、将来を懸念する学校  
の先生や両親に反対されるケースもある。

潜在的な力をもつ女子生徒に理学の魅  
力を語り、理系進学を支援することは、  
やがては理学全体の発展につながる。  
女子高校生のためのサイエンスカフェは、  
このような視点から山本智前広報委員長  
の主導のもと立案・計画され、今回、  
実現に至った。

当日は大月祥子博士(地球惑星  
科学専攻)の講演、テーブルごとに分か  
れての大学院生とのディスカッション、  
最後に研究室見学と、充実したプログラム

が用意された。どれも好評であったが、  
「大学院生と話ができることがとてもよ  
かった」という意見がたいへん多く見ら  
れた。10年後の自分の姿を想像しながら、  
具体的な話ができただけのよかったよう  
である。

「理系に行こうと思いました」。そのよ  
うに感想を述べてくれた生徒もいた。た  
いへんうれしいことである。今後も女子  
生徒の理系進学を支援する活動を続けて  
いきたい。



■ ディスカッション・ティータイムに講師の大月氏、大学院生と話す参加者たち

## 田中秀実博士の台湾中央大学 名誉メダル受賞

松浦 充宏 (地球惑星科学専攻 教授)

地球惑星科学専攻講師の田中秀実博士に、  
台湾国立中央大学から名誉メダルが授与  
されました。田中博士は、地震断層の野  
外調査やボーリング調査を行い、そこで  
採取したサンプルを物質科学的に分析して、  
地震がなぜ起きるのかを研究する「断層  
物質科学」の第一人者です。今回の受賞は、  
台湾中部に大きな被害をもたらした1999年  
のチチ(Chi-Chi)地震の原因であるチェル  
ンプ(Chelungpu)断層の掘削プロジェクト  
(Taiwan Chelungpu-fault Drilling Project)  
を成功に導き、プロジェクトチームと協力

して地震断層研究の大きな成果を挙げた  
ことに対するものです。

実際、田中博士は、このプロジェクト  
に情熱をもって加わり、長年培ってきた  
断層掘削およびコアサンプル分析の経験  
と知識のすべてを注ぎ込みました。この  
ことが実を結び、名誉メダルの受賞と  
なったのですから、研究者冥利に尽きる  
と思います。固体地球科学グループの同  
僚として、田中博士に心から「おめでとう」  
を申し上げます。名誉メダルの授与式は、  
2007年6月10日に台湾国立中央大学  
地球科学院で行われました。東京大学  
大学院理学系研究科と台湾国立中央大学  
地球科学院は、今年から学術交流協定  
を結ぶことになりました。理学系研究科  
で交流を推進するのは地球惑星科学専攻



■ 田中秀実講師

ですが、この学術交流協定締結の背景  
には、田中博士のチェルンプ断層掘削  
プロジェクトへの多大な貢献と、その  
後の共同研究を通じた密接な研究者交流  
があります。この点でも田中博士に感謝  
したいと思います。

## 先端レーザー科学教育研究 コンソーシアム設立

山内 薫 (化学専攻 教授)

レーザーやフォトンクスという言葉に代表されるように、光に関すること、そして、光を用いて物質を調べるという光科学分野の研究と技術開発の成果は、今や、密接にわれわれの生活に結びついています。日本では、基礎科学から産業分野に至るまで、光科学分野の研究者層は厚く世界をリードしています。この潮流の中で、わが国がこれまで培ってきた実績を活かし、先端光科学分野において国際的に活躍することのできる次世代を担う人材の育成に組織的に取り組むために、文部科学省特別教育研究経費（教育改革）事業「先端レーザー科学教育研究コンソーシアム」が2007年度4月に発足いたしました。

このコンソーシアムは、大学院理学系研究科附属「超高速強光子場科学研究センター」が中心となり、大学院工学系研究科附属「量子相エレクトロニクス研究

センター」、総合研究機構レーザーアライアンス」と協力して、東京大学の「理工連携事業」として推進するもので、従来、分散して行われてきた学部および大学院教育の講義について、フロンティア研究と密接に連携させつつ、カリキュラムの系統的再構築を行います。このコンソーシアムの特徴は、東京大学だけでなく、光科学分野の教育に実績のある電気通信大学や慶応義塾大学をはじめとする大学、研究機関、そして、先端光科学産業を支える企業が協力し、人材教育のための協力体制を構築することにあります。

本教育研究コンソーシアムでは、本年10月より、パイロットプログラムとして、東大、電通大、慶応大のおもに修士課程の大学院学生を対象として先端光科学の講義および実験・実習を、理学系研究科化学専攻「講義室」および「先端レーザー科学教育研究コンソーシアム実験室」において行います。2008年度より、単位互換制度のもと、大学院講義「先端光科学講義」、「先端光科学実験」を開講いたします。キヤノン、アイシン精機、浜松ホトニクス、三菱電機をはじめと



Consortium on Education and Research  
on Advanced Laser Science

■ 先端レーザー科学教育研究コンソーシアムのロゴ

する9社の企業が、実験・実習に参加することになり、先端光関連企業の研究開発の現場研究者から、イノベーションテーマや、先端レーザー科学により解決されるべき課題等について直接に問題提起を受け、次世代をにう若手人材育成に取り組みます。

2007年4月24日(火)には、小柴ホールにて記者発表が行われ、引き続き発足の式典と講演会が行われました。式典では、岡村定矩理事・副学長、山本正幸理学系研究科長、松本洋一郎工学系研究科長、益田隆司電気通信大学学長から来賓の挨拶があり、その後の講演会では活発な質疑応答があり、翌日以降、新聞各社紙面にて、本コンソーシアムの取り組みが相次いで紹介されました。

## 植物園で開かれた 学生・教職員交歓会

植物園園長 邑田 仁  
(附属植物園 教授)

理学系研究科・理学部の学生・教職員交歓会は5月に附属植物園で行うことが恒例となっており、本年は2007年5月21日(月)午後3時から開催された。さわやかに晴れた例年にない好天で、585名(学生498名、教職員84名、名誉教授3名)が参加した。学生有志と職員により、飲み物と軽食がサービスされ、参加者はそれらを手にしてまだ新緑の明るさを保っている桜(ソメイヨシノ)の下に思い思いにたたずみ、また敷物を敷いて車座となり、大いに

話がはずんで交歓会の目的が達成された様子であった。

当日は公開温室や、一般には公開していない研究温室も公開され、数人ずつまとまって散策するグループがいくつも見られた。世界的に見ても他の施設ではめったに見られない希少植物や、温室を

利用して行われている小笠原諸島の固有絶滅危惧植物の保全・増殖の状態などを見て、研究植物園の雰囲気を感じていただけかと思う。東京大学の学生証、職員証の提示により休園日以外は無料で入園できるので、普段からもっと利用していただければ幸いです。



■ 小笠原諸島固有絶滅危惧植物の保全・増殖が行われている植物園の研究温室(6号室)

## 第1回理学部学生選抜国際派遣プログラム - ハーバード大学, MIT -

五所 恵実子 (国際交流室 講師)

理学部では海外の大学を訪問することで学生が国際的視野を広げ、幅広い活動ができることを目的として、1998年度より「理学部海外渡航制度」を設け、これまでにのべ67名の理学部生がインディアナ大学 (米国)、韓国科学技術院 (KAIST) およびソウル大学 (韓国)、復旦大学 (中国)、ルイ・パスツール大学 (フランス)、パドバ大学 (イタリア)、UCバークレーおよびスタンフォード大学 (米国) を訪問した。2006年度からは将来、世界で活躍できる優秀な理学部生を派遣することをプログラムの重点に置き、名称も新たに「理学部学生選抜国際派遣プログラム (ESSVAP: Elite Science Student Visit Abroad Program)」として実施している。

新しいプログラムでは参加者の選別にさいして、1人当たりの面接時間を多く取るため、書類選考と面接の二段階選抜とし、書類選考 (申請書、申請理由書、成績証明書等) を通過した20名に対して1人約8分の英語による面接を行っている。参加募集人数は10名で対象は理学部3・4年生。募集は秋に行われ、国際交流室および各学科の掲示板に掲示される。選考では、若いうちに海外経験の機会を与えることで将来、研究者として世界レベルで活躍する学生を育てるという理念のもと、成績が優秀で英語によるコミュニケーションが十分に取れ、プログラムへの参加経験を自他ともに十分に活かせる学生を選抜している。これまでの海外渡航制度と同様、このプログラムの一番の特徴は参加者の往復渡航費および滞在費を理学部が負担 (1人あたり約20万円) していることであり、学部生の海外訪問で大学が費用を賄っているものとしては他にほとんど例がない、貴

重なプログラムである。なお、参加者は帰国後、報告書を日本語と英語で作成し、自分達の体験を他の理学部生にも還元することになっている。

今回の第1回理学部学生選抜国際派遣プログラムでは41名の応募者の中から選ばれた10名の学生が、2007年3月6日から15日にかけての10日間、アメリカのハーバード大学とマサチューセッツ工科大学 (MIT) を訪問した。

3月上旬だというのに夕方、ボストンのローガン空港に着いた時の気温はマイナス15度。その後、晴天にもかかわらず真冬なみの寒さが3日間続いたが、幸い後半には気温も上昇し、ようやく春の訪れを感じることが出来た。そして、毎朝、宿泊先のホテルで朝食を取ると、1週間乗り放題で15ドルのパスを使い、皆で地下鉄を乗り継いで大学のキャンパスへと向かった。

ハーバード大学は1636年設立、学生数約2万人 (学部生数6,600人余り) の全米最古の私立大学である。広大なキャンパスは町と一体化し、まるでヨーロッパを思わせるレンガ造りの建物がキャンパスのあちこちに建っているが、中でもハーバードヤードにあるワイドナー図書館の大きさと存在感には圧倒される。ハーバード大学では学部1年生は全員キャンパス内の寮で生活し、構内に数多くあ

る図書館のいくつかは24時間開館するなど、学業に専念できる環境が整っている。一方のMITは1861年設立、学生数約1万人 (学部生約4,100人) の私立大学。約68万平方メートルの広大なキャンパスには近未来を思わせる独創的な建物が点在し、創造的な雰囲気と空間を醸し出していた。2つの大学は地理的に近いことから学生や研究者同士の交流も多く、学生は互いの大学の授業を受講することができる。

今回、ハーバード大学では化学・物質科学専攻教授のシンシア・フレンド (C. Friend) 先生のお話を伺い、研究室を訪問させていただいた他、MARSEC (Materials Research Science and Engineering Center)、NSEC (Nanoscale Science and Engineering Center) の二つ



■ ハーバード大学の学生ガイドキャンパスツアー

の研究所も見学し、実際に学際的な研究が行われている現場を見ることができた。

MITではPSFC（Plasma Science and Fusion Center）を訪問し、複数の先生方による講義と実験施設の見学の後、短い時間ではあったが現在、留学中の日本人学生の方と会って話を聞くこともできた。また1987年にノーベル生理学・医学賞を受賞され、欧米生活が40年以上にわたるといふ利根川進先生にお目にかかり、2時間半にわたってアメリカの研究・教育環境についてお話しいただいたりPicower Institute内の研究室を直接、案内していただいたりした。そのほか、MIT-Japanプログラムオフィス主催でMITの学生とインド料理の夕食を取りながらのディスカッションで交流する機会にも恵まれた。

プログラムでは個別の研究室訪問や研究室・研究所の見学、両大学の学生との交流のほか、実際に留学中の日本人学生（ハーバード大学、MITには東大出身の学生が何人も留学しており、互いに横のネットワークでつながっているようである）と話す機会を得るなど、実質7日間の滞在ながら2つの大学が地下鉄で2駅の距離しか離れていないという地の利を活かし、学生達は世界トップレベルの大学について多くを見、聞き、学んだようである。今回が海外初体験という学生も何人かいたが、これまで日本でしっかり語学を学んできた成果を発揮して英語によるコミュニケーションもとくに問題なく、短時間で実に多くのことを吸収してきている。学科も学年も異なる10名がそれぞれ自分の目で見て直接、経験し、感じたことは、きっとこれからの人生において目には見えない大きな財産として生きていくであろう。

プログラムの実施に際しては国際交流委員の先生方を始め、理学系研究科の先生方に多大なるご支援・ご協力をいただき、また訪問先のハーバード大学、MITの教職員の皆様、そして学生さんには凍えるような寒さの中、温かく迎



■ ワイドナー記念図書館（ハーバード大学）

え受け入れていただきどんなに有り難かったことか、この場をお借りして深く感謝申し上げたい。これまで過去6回の海外渡航制度に参加した学生、そして今回、新たな派遣プログラムに参加した学生を見て思うのは、彼らは輝きを秘めた原石であり、理学部は磨けば磨くほど輝く学生という宝をもっているということである。きっと彼らこそがこれからの東大、日本、世界を作っていくのだろう。今回プログラムに参加した学生の1人が感想で「理学は世

界のものだと感じた」と述べていたが、ぜひこれからも1人でも多くの学生にこの体験をしていただきたいと思う。

なお、次回の第2回理学部学生選抜国際派遣プログラムの訪問先および募集については9月に国際交流室のホームページ ([http://www.s.u-tokyo.ac.jp/ilo/home/ShortExchangeProgram\(J\).htm](http://www.s.u-tokyo.ac.jp/ilo/home/ShortExchangeProgram(J).htm)) に掲載の予定で、希望者には報告書を配布している。プログラムおよび報告書についての問い合わせは理学部国際交流室 ([ilo@adm.s.u-tokyo.ac.jp](mailto:ilo@adm.s.u-tokyo.ac.jp)) まで。



■ MITの象徴、Rogers Building



■ 斬新なMITの建物

## プログラムに参加して ～学生の感想～

ハーバード大学とMITを訪問して驚かされたのは何よりもその大きさです。東京大学のキャンパスも日本では大きい部類ですが、向こうの大学はキャンパスというよりもむしろ街という形容が正しいほどの広さです。建物の内も外も十分なスペースがとられていて、人が多くても混雑した印象はありません。ハーバードは周辺の土地を買い取って、いまだにキャンパス拡張を続けているとのこと。建物についてもハーバードは歴史を感じさせ、MITは新しく綺麗という違いはあれ、どちらも威風堂々とした趣をそなえています。研究や教育はもちろんなのですが、キャンパスを見るだけでもさすがに世界でトップクラスの大学だと思いました。

(物理学科4年, 高吉 慎太郎)

今回の滞在ではさまざまな経験、人との出会いがありひじょうに有意義な時間を過ごせました。まず、参加者各自が滞在中の約半分の予定を立てる、という手作り感がESSVAPの特徴のひとつです。とくに自分であらかじめ先方と連絡をとっての訪問は、最初不安でしたが、他ではできない貴重な体験になりま

した。また、現地の学生とのディスカッションでは話題が色々広がり、とても楽しめました。数学科については両校とも落ち着いた雰囲気での印象を受けました。そして大学院生のレベルがひじょうに高かったです。今回、両校の規模、伝統、経済力にはひじょうに驚かされましたが、一方で、東大の世界で通用する面や優れている面もわかった気がしました。

(数学科3年, 金澤 篤)

今回ESSVAPに参加できて意義深かったのは、ハーバード大学とMITでの研究活動や学生生活を、そこにいる人々と触れあう中で直接、経験する機会が得られたことです。学生とのディスカッションや、自分が興味をもった分野の教授への個人訪問など多くの貴重な体験をすることができました。そうした中で強く感じたのは、彼らが新しいものごとに対してオープンな姿勢をもっているということです。多様な考え方を重視していて、日頃は意識しない日本での生活についても新たな視点から見られるよう

になりました。また休日にはボストンを現地の学生とまわったりと、多くの人や文化に触れることができるのもこのプログラムの魅力だと感じています。

(物理学科3年, 門内 晶彦)

今まで伝聞でしかなかったアメリカの大学に肌で触れることができ、印象が変わった。

キャンパスのスケールの大きさや人種の多様性などには圧倒されたが、現地の学生達との交流を通して彼らが同じように楽しんだり悩んだりしながら勉強・研究に励んでいる様子を知り、大きな親近感、そして仲間意識を覚えた。

とは言え、アメリカと日本の大学では制度自体とその背景にある習慣・哲学が異なる。違う制度のもとで生活を送っている研究者の方々のお話は、今後の進路を考える上でたいへん参考になった。また、日米を対比することで、今まで見過ごしていた日本のいくつかの特徴に気づき、普段の生き方を見直す新たな視点を得られた。

(物理学科3年, 藤井 友香)

ESSVAPに参加して1番印象に残ったことは、日本から留学している学生との交流です。10日間の滞在中に、MITとハーバードの両大学で多くの日本人留学生と話をすることがありました。一緒に食事をしながら、彼らは留学までの経緯や大学生活のことについて詳しく教えてくれ



■ 利根川進先生(左から3番目)と一緒に記念撮影

ました。私が話をした学生は皆、自分の留学に満足しており、学生生活を十分に楽しんでいる様子でした。言葉の問題を含め、はじめはたいへんなことばかりだったようですが、そのぶん充実した毎日を送っているようです。留学をすることはひとつの挑戦だと思いますが、それを達成した彼らの言葉には重みがありました。彼らとの交流は貴重な経験でした。

(物理学科 3年, 荒井 慧悟)

プログラムに参加して印象深く、有意義だったことは、さまざまな先生、学生の方々のお話を伺えたことなどたくさんありますが、その中で応募した時点であまり予想していなかったことで、有意義な経験となったものが、現地で学んでいる日本人留学生の方々とお話する機会があったことです。今まで留学することというのはあまり身近なことではなく、どこか遠い話のような気がしていました。しかし、海外の大学で学ぶことの大変さや、なぜ留学しようと思ったのかなどを実際にお聞きすることができたことはとても良い経験となりました。

(地球惑星物理学科 4年, 川上 悦子)

私は2005年8月から1年間、米国イリノイ大学に留学していた。その私がさらにESSVAPに応募したのは、留学経験を通して海外の大学院への正規進学を視野に入れ始めたからである。所属を希望する研究室の見学は誰しもしたいと思うもの。加えて他の理学部生との交流や、特殊な施設の見学など、さまざまな+αのあるところが魅力的だった。

実際に、プログラムでは個別のラボ訪問の時間が多く取られ、研究室見学という目的は大いに達成された。東大理学部の official な紹介状をもっていくことは、個人でいくよりやはり歓迎されたと思っている。また現地の日本人大学院生の生の声を聞く機会も多かった。

訪問校への留学を考える人には、ぜひ

チャレンジしてほしいプログラムだと思う。

(化学科 3年, 白水 美佳)

広大なキャンパスとレンガ造りの美しいハーバードの建物、MITの個性的な建物、そして凍えるような寒さや多すぎる食事、どれをとってもとても印象的な滞在でした。今回のプログラムを通してもっとも強く感じたことは大学院教育における日本とアメリカの違いです。研究をするという面においても、経済的な面においても大きな違いがあると思いました。以前から両者に違いがあるということは知っていたつもりでしたが、実際に現地で学生や教授と話すことでそれまでの印象が変わったということが数多くありました。また、ハーバードの日本人の大学院生の方々とお話できたことも良かったです。このような貴重な経験ができて本当に良かったと思います。

(生物化学科 3年, 中山 博文)

訪問先での学生との交流などを通して、大学入試や教育制度の違いを直接、聞いたり、学生生活の違いを肌で感じたりしたことは、翻って自分自身を振り返るきっかけになりました。また、個人的な研究室訪問の際には、初対面の教授に“Hi, Momoko!”と声を掛けられたのにはびっくりし、アメリカの水平感覚を垣間見ました。つたない英語でも一生懸命に

話したら聞いてもらえましたが、もどかしい思いをしたのも事実です。今回、サイエンス・英語力などさまざまな点において自分にいかに多くのことが足りないのか痛感させられたことで、今後一層努力していこうという思いが強くなりました。ひじょうに貴重な機会を与えていただいたことに、心より感謝しています。

(生物学科 4年, 池内 桃子)

海外の大学ってどんなところだと思いますか。日本の大学とどう違うのでしょうか。もちろん、調べればある程度はわかります。しかし、実際に現地へ赴いて肌で体験してくるのとは、受ける印象や得られるものに雲泥の差があることを心に留めておいてください。今回の渡航では、なぜアメリカの大学が世界中の研究者を惹きつけてやまないのか、その理由がおぼろげながらも理解できただけでなく、現地の人々との交流を通じて実に貴重な体験をすることができました。限られた字数のためESSVAPで得られたもののすべてをお伝えすることはできませんが、この文章を読んでくださった方にはぜひ次回の渡航に参加し、実りある滞在をしていただけたらと思います。

(生物化学科 3年, 海老原 章記)

\*学年は、2007年3月の渡航時のものを記載しました。



■ ボストン最後の夜、名物のロブスターと共に